

まえがき

書くという行為は、カタルシスを伴う。体験と思想の葛藤から生まれた毒の浄化である。有島武郎ほど「書くことによる自己救済」という言葉に、強い切迫感を感じさせる作家はいない。

彼の作品は、ストーリー性よりも思想性が強く、『惜しみなく愛は奪ふ』、『生活と文学』などの評論においてはことさらに観念的と感じられる程、思想性が際立っている。有島の作品には、ある不可解さを伴うが、むしろ作家その人が持つ不可解さのほうが深刻である。それは生前の彼の人柄や考え方を知る資料が少ないからではなく、それとは反対で、有島が残した日記、感想録、書簡などが膨大にあり、それらによって浮かび上がってくる作家像が不可解なのである。

西洋と日本という二つの価値観をいずれもほぼネイティブ・レベルで受容した有島の場合、そこから生まれたのは、時代を導く新たな思想といったものではなく、とてつもない葛藤、価値観の激しいぶつかりあいのであった。彼の行動原理の不思議さは、しばしば価値観相互の相克に由来すると考えられ、こうした受容の外的原因からだとして解釈された。しかし、私には寧ろ彼自身の持つ内的要素のほうが彼の性格と価値観を左右しているように思う。このことが彼の人物像を統一的に彫り上げていくことを困難にしているように思われる。

人間は、おのれの行為を意義付けようとする存在である。つまり自分の行動を定義し、それによって、それ以降の行動に方向づけを与えんとする。有島が残した膨大な自己へ向かう発言は、何者かにならんとして喘ぐ、切迫した自己捜しの作業であった。しかしそもそも言動をすべて論理で統一できるはずもなく、また言葉によって以降の言動をコントロールできるものでもない。それにも拘わらず必死に自らの生の方向を定義づけようとした。この葛藤の中で

おのれ自身を探り、書くことによってカタルシスしつつ、辛うじて生のバランスを保ったのである。それゆえ、彼の発言は起伏が激しく、矛盾や混乱も多かった。それらの混乱は日記やエッセーに留まらず、思想性の強い彼の小説にも及んでいる。

本書の中心を成す有島武郎研究は、主に私が大学院時代の論文をまとめたものである。有島に取り組むなかで、今述べたように、その言動を統一的に把握し論証することに限界を感じた私は、敢えて有島という人の歴史や作品の背景に焦点を合わせるのではなく、作品そのものに着目して論じることにした。作品世界にこそ、直面した課題の矛盾も葛藤も調和も最も端的に確実な形で現れていると考えたからである。

『かんく虫』や『三部曲』に見られる聖書の原典の意味から逸脱した引用、『老船長の幻覚』における登場人物の現実性と幻覚性の設定のアンバランス、『カインの末裔』の語りが語った主人公と、作品空間を生きる主人公の間の溝、更には『クラ、の出家』において、キリストの栄光を浴びる喜びを迎えるクララの決して歓喜とは言えない涙の繰り返し、等々、彼の作品には言葉や引用や筋の設定などに多くの矛盾が現れている。それらの矛盾に着目し、或るミクロの現象からマクロの世界に繋がる答えを引き出そうとしたのがこれらの論文である。ミクロな視点から現象を追究することで、今まで見えてこないマクロな世界のメカニズムが見えてくるようになる。

本書の最初の章には、有島のジレンマに類似した作家たちの作品を置いた。生と存在を執拗に問いかける埴谷雄高の『死霊』は、観念的な作品の代表として、有島のエスカレートした継承とすら感じられる。しかし、その生と存在といった論争の内容から少し焦点をずらして、登場人物の会話の仕方に着目すると、全く違う『死霊』の世界が広がってくる。また、言葉は、作者の歴史的事実以上に確実な生の姿を提示してくれる、芥川の『片恋』は、恋の話ではないし、『点鬼簿』も彼の私小説ではない。『片恋』には別の思いを託しており、恋愛とは程遠い苦悩が描かれている。

本書の最後の章は付論として、私が教員時代に入ってから、日本の文学作品と中国の文学作品の関わりを論じたものである。比較文学の研究は現象の類似性、つまりAはBに似ているという落とし穴に陥る傾向がある。それが論証的に展開されたとしても、偶然的類似性など証拠として無効である場合が多い。この章で行われた作業は、こういった現象に留まる論証をなるべく避けて、言語レベルの世界から新しい比較を試みたものである。

第一章 生と存在を問う

第一節 埴谷雄高『死霊』——会話の中のジェンダーとその変遷——

はじめに

埴谷雄高は『死霊』を、「おしゃべりによってやっと思想を展開している『思想小説』⁽¹⁾だと自ら定義したことがある。その通りだと思う。ただし、『死霊』の「思想」は、男性登場人物を中心に語られているが、男性同士の会話は攻撃性に満ちた論争が殆どで、そのような競争的な会話によって記された葛藤より、むしろ、女性登場人物の混じった会話の方に、思想の展開が見えてくる。だから、『死霊』の中の女性たちは男性たちの会話の重要な聞き手でありながら、参与者でもあるわけで、強いていうなら、『死霊』は男性たちが女性たちに語ることによって、展開している『思想小説』だと考えてもおかしくない。

では、このような男性と女性の「おしゃべり」の中で、作品社会の男性と女性、特に今まで重要視されて来なかった女性をどのように定位すべきかを、具体例をあげながら、検討してみる。

一、男性主人公の会話の難解さ

まず、男性同士の会話の難解さから出発したい。『死霊』第一章に、主人公三輪与志が風癲病院を訪れ、岸博士と会話する場面を例に考えてみる。精神科医の岸博士は、患者の治療に関して、「一つの観念から生ずるさまざまな連想を整理し、一定の連想のみを絶えず習慣づける強制」、つまり「ある観念から特定の行動のみしか生じさせなくす